郷土室だより

第 62 号

平成元年2月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543－9025

埋もれた文化財 3

安藤菊二

＜その7＞ぎ宝珠と鬼瓦

都市というものは、僅な歳月の間にこうも変貌するものなのか。

かつて都内を流れて美観を添えていた堀割は、いつか下水化し埋立られて市街地と化し、馴染深かった橋は次々姿を消している。失われぬまでも、景観が改って、東京都の代表的名橋、日本橋や京橋の欄干を飾っていたぎ宝珠にしても、保存策を講じたのか講じなかったのか、かいもくその所在を詳らかにしない。

1 日本橋のぎ宝珠

日本橋が純日本式の木橋から、西洋式の木橋に変ったのは、明治六年である。その時、江戸時代を通じて橋を飾っていた青銅製のぎ宝珠は廃された。十箇もあったはずなのに、どこへ片付けられてしまったのであろう。

結末のわかっているのは、大隈重信伯の入手せられた一箇である。

それは、明治一五・六年ごろ、売込みに来た道具屋の手から購入されたもので、その頃偶然伯の手に入った、京都宇治橋のぎ宝珠と対にして、燈籠代りに庭に飾っておいたところ、一夜、盗賊の一味が、荷車を曳き込んで、二つとも盗み去ってしまった。鉄製だった宇治橋の方は、近所にうち捨ててあるのが見つかったが、日本橋の方は、警察の探索にも拘わらず、ついに行方不明になってしまった。鋳つぶされてしまったらしいのである。

それともう一つ、入手経路は不明だが、日本橋橋南の老舗、黒江屋漆器店に珍蔵されているのがある。

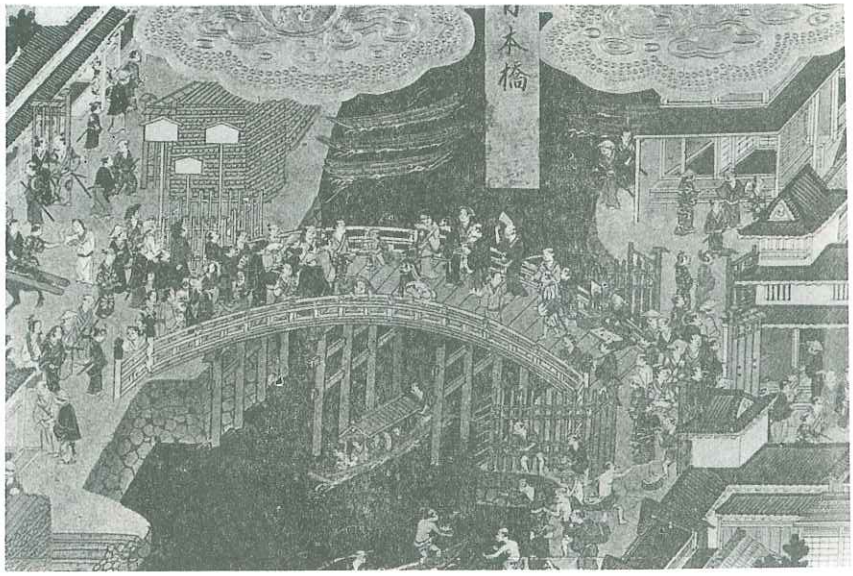
ぎ宝珠の高さは五五センチ、下部の直径が三二センチ。強い衝撃を受けたものとみえて下方の一部がゆがんでいる。

胴には「萬治元戊戌年」九月吉日「日本橋」御大工「椎名兵庫」の文字が五行に刻みつけてある。

優雅な形体、堂々たる風格、大江戸の春を偲ぶに足る。いつぞや、何かの催しの折、同店の飾窓に飾られていたことがあるから、見知っておられる方も多いであろう。

石町の時の鐘と並ぶ、中央区の大切な文化財の一つだと私は思っている。

明治六年日本橋架け替えの時、このぎ宝珠に代って、ぎ宝珠型の頭をした



江戸図屏風〔寛永中期〕より

石の欄干柱が登場した。明治四四年、木橋から現在の「日本橋」に改築された時、この石造の欄干柱にも、廃棄の運命が廻って来た。そして、その内の一本だけが向島百花園の庭内に保存されることになった。コケシ人形の形をして、胸元に丸い穴が開いていて、日本橋の文字が彫ってある。この文字は徳川十五代将軍慶喜公の筆になることも有名だ。

所在地は墨田区ではあるが、中央区ゆかりの遺品として、記憶に止めておいてしかるべき石柱である。

2　京橋の石造欄干柱

河川としての役目を果し終えた、終末期の京橋川は、憶い出してみるとどぶ川同然のずいぶん惨めな姿になっていた。

それが昭和三九年に埋立られて、すっかり生れ変ったかわり、「京橋」は失われて、跡地のみを残すばかりになった。江戸時代の橋を飾っていたぎ宝珠の行方については、ぜんぜん聞知るところはない。

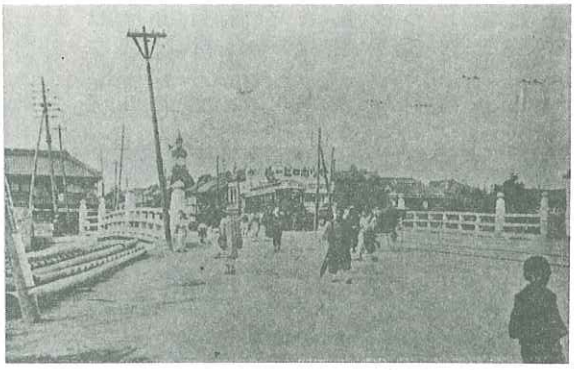
その代りに、明治八年三月の改架時に造られた、石造の欄干の親柱が、旧京橋の南北の橋詰に保存されている。

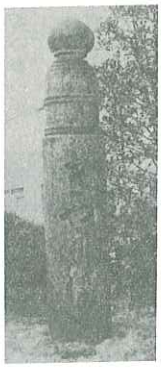
通町方面から歩を運ぶ人は、銀座八丁の関門めく、高速道路にとじこめられた、うす暗い左方の植込みに、「京橋」の文字を彫った石柱に接するであろう。

大正一一年に木橋京橋が改架されるまで使用されていた欄干の親柱で、工事中は、日比谷公園の苗圃に移して保管してあったのを、昭和九年一二月新京橋の橋台地整備がすんだとき、記念品として取戻し建設したものという。

橋の南西、交番の傍に立つ一本には大字の平仮名で「きやうばし」の文字を刻む。

この方は、当時三鷹村に設置されていた、京橋区の小学校の郊外学園の入口の門柱として保存し、昭和四年復興京橋が竣成して、橋南に公衆便所が作られ、一部が芝生となった時、待ちかねていた銀座町会の人々が、その頃は荻窪の玉木彌市氏宅に移されていた石柱を譲りうけて移築したのであった。





京橋〔明治四十年〕「京橋区史」より
京橋欄干の親柱

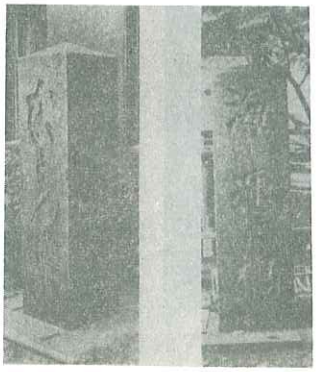
孤立する石柱はこんなに大きな手すりの柱が必要だったのかと思わせるほど背が高い。橋名の文字は、明治の詩人佐々木支陰の筆になる。

3　海運橋の橋柱

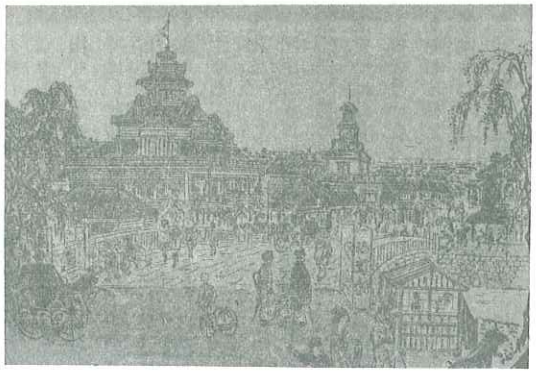
明治八年六月、京橋の改架と前後して、材木町一丁目から坂本町一丁目に渡る橋、海賊橋も石造に改築されて、橋名もめでたい海運橋に改まった。

坂本町側橋北の第一国立銀行と調和がとれた橋で、すでに木橋時代から、第一国立銀行を描いた錦絵には、かならずといってよいほど、前景として描かれている。現在は、橋下の紅葉川は道路と化し、上は高架道路が跨いで、橋の存在意義は失われてしまい、跡地に残された旧時の石柱のみが、昔を語り顔に残っているにすぎない。

もとの橋東北側の空地に保存されて



海運橋の橋柱



海運橋の図

いる石柱は、高さ一五〇センチ、幅四五センチの角柱で、大字の楷書で「海運橋」の文字を刻み、左側に「紀元二千五百三十五年六月建」と彫ってある。

紀元二千五百三十五年は、西暦に直して一八七五年、すなわち明治八年である。『新撰東京名所図会』の「海運橋の図」によると、この橋名柱は橋の西南隅に用いられていたはずで、正確に旧位置に立っているのではないが、海運橋の橋名を刻んだ石柱が、記念品として保存されていることは喜ばしい。

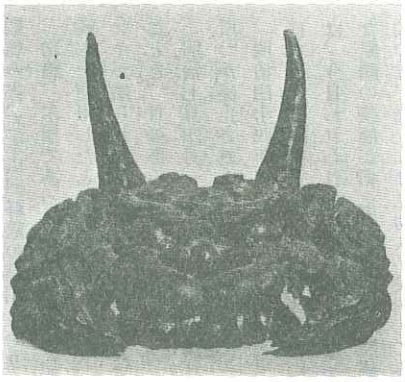
石柱は西北側にも「かいうんはし」と彫るものが残してある。

同時期に石橋となった「江戸橋」にしても「新場橋」にしても、旧橋を記念すべき石材は何も残されずにしまったことを思えば、海運橋は幸せだったといってよいかもしれない。

4　鬼瓦

海運橋のことを書いたついでに、第一国立銀行の鬼瓦について触れておこう。第一国立銀行の建物は、明治五年六月、清水喜助翁の設計施工によって竣立した、五階建洋風建築で、「築地ホテル館」と並んで、東京市民の注目を浴びた建物であった。

小林清親の筆になる雪中の第一国立銀行の図や、国輝描くところの「東京名所海運橋五階造真図」などの図柄は誰しもすぐに思い浮べうるほどに知られている。ところで、しさいに見るとこの銀行建物の三層の棟に、大きな鬼面の瓦がついている。しかも、その数は側面描写の図様の上で、七個を数える。銀行だというので意識的に多数の鬼面瓦を取付けているところがおもしろい。



鬼瓦「第一銀行史」より

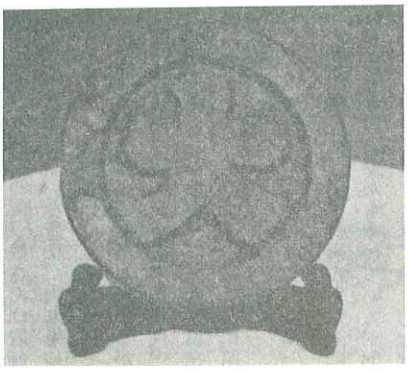
銀行と向い合うことになった薬屋では、こう鬼瓦ににらまれていては商売にならないと、入口と裏口を入れ代えたというような話を、所の人の口から私は聞いた。

この記念すべき建物は、外観のわりに内部が事務的でなく、明治三一年五月に取毀され、建物の記念として、屋根に飾られていた鬼面瓦が保存されることになった。何箇残したのかまだ聞いても見ぬが、その瓦の写真は、『第一銀行史』上巻三〇〇頁に載っている。

5　大丸の屋根瓦

瓦といえば、『日本橋二之部町会史』大伝馬町二丁目の条に、滝富ビル建設の際出土したという、大丸呉服店の棟瓦の写真が載っている。今でも同社にあるかと電話をしたら、出土したのは昭和八年頃のビル建設の際のことで同社では、大丸さんにあやかりたいものと、たいせつにしていたが、先年大丸百貨店で二百五十年史を編集する時、資料を集めていると聞いて、お返し申したという返事であった。

大丸百貨店の手に戻ったこの鬼瓦は中央区にとってもまだいじな文化財のように思われる。



大丸の棟瓦「日本橋二之部町会史」より

橋ものがたり

広瀬千香

川は隅田川、橋は日本橋が王様であろう。東京はもともと浅瀬の海が干上ったり埋立てられて、今日の姿になったというから、水に縁は、大いにある。

生活と水になじみ深い土地に大阪がある。あちらにも日本橋はあるけれどニッポン橋と呼び、東京のは、ニホン橋である。この橋を日本全国の中心とみなして、東西南北、駅路の起点として里程標が建てられている。

山中共古翁の『共古日録』の中に、

日本橋の名称

寛永の江戸絵図をみるに、日本橋の名称ありて、立派なる橋の図あり。天正御入国後江戸市追々に開けたるにより、此橋も出来て、名も付けられしことと見ゆるが、日本の文字を此橋に命名せしことは、時代の人心よりしては、かゝる大なる名を考へ出せしとは思はれぬことにて、恐らくは、此辺の流れに、二本の橋ありしより、二本橋といい来りしを、日本の文字に当てはめしことにはあらずやと、予は思へり。

とある。

江戸がまだ漁村の頃、慶長八年（一六〇三）初めて橋が架ったと、『中央区史』には見えており、それ以前は渡し場であったもののようである。何時から日本橋と呼ぶようになったか？

詮索はむつかしいが、荻原乙彦著『東京開化繁昌記』によれば、この橋の架橋は、明治五年工事にかかり、翌明治六年（一八七三）五月三十一日竣工したとある。橋詰の橋名石標は、萩原秋巌翁の書、石工広瀬群鶴の鐫刻という。

勿論、木橋であったが、良木槻の如鱗木を使用したというのに、それにペンキが塗られていて、まことに惜しいことと、目のある人は云ったという。

明治七月四月一日に、「日本橋高札所」が廃止された。

明治四十四年（一九一一）四月三日、日本橋新築開橋式が行われた。これには、今日われわれが眼にしている重厚な麒麟の装飾が据えられている。開橋式の日、橋上には見物人が殺到して負傷者を出したほどであった。昭和十年四月には、架け替えて以来二十五年の祝賀が催され、昭和二十一年八月には日本橋復興祭が行われて、この時、全国里程表に、ローマ字、哩数が書き込まれた。

。　。　。

江戸時代から、日本橋は京へ上る旅立ちの起点とされていた。早朝七ツ時（午前四時）此所をいで立ち、札の辻辺に来て漸く空も白み、提灯を消した。品川で日の出を拝む。見送り人も、此処までででお別れ。約二里の道程である。

泉鏡花作『日本橋』は劇化され、初演は大正四年三月、伊井蓉峰、喜多村緑郎など新派俳優によって、本郷座にかけられたが、以後息長く上演されている。日本橋の古い情緒とせりふは、も早お芝居でしか味わえなくなった。

野田宇太郎の『文学散歩』や、池田弥三郎の『無くなってゆく橋』などに橋の変遷が書かれているが、私の覚えている中でも、随分沢山の橋が消え去っている。堀割りは自動車道となり、橋の上には高速道路が架り、下町と水との縁は絶ち切られてしまった。片側町の柳の並木の下に佇んで、水に映る灯を懐かしんだのはもはや夢。

。　。　。

新富町の相馬ビル（アパート）の一号館に私は住んでいた。ここの四階に作家の平林彪吾がいた。対向の相馬二号館には、丹羽文雄がいた。氏が書いたものに、一夜に十橋を渡れば、心願が果せるという巷間の占いのことを読んだことがあるが、此処に住めば、一夜に十橋はおろか、その倍もの橋から橋を渡り歩くことはたやすく出来る。何しろ橋、橋、橋。試みに、眼の前の築地橋から、采女橋、万年橋、祝橋、亀井橋、三吉橋、新富橋、弾正橋、白魚橋、桜橋…これだけで十橋、入船、門跡、備前、暁、まだまだ尽きない。

川には船の便があった。河岸には材木、炭、竹、砂などの問屋が控えていて、はしけが物資を運んでいる。又、海釣りや遊楽のための船宿があった。中村屋や上総屋などの船宿は、仕事の合間には海苔作りもしていて、如何にも海に近い匂いを感じさせた。潮の満ち引きも見られた。

歌舞伎座前の弁当屋、弁松に働いていた善さんは、のちに松竹本社の衣裳部に勤めるようになって、三吉橋袂の会館にいた。知己になって、その人から聞いた話。歌舞伎座関係の人たちはみな派手好きで、花時には船を仕立てて、向島へ繰り出した。昔のお花見は年間の楽しみの一つで、娘さんは着飾り、若い者はお揃いを着て、鳴りもの入りでワンサと船を出したという。

竹葉は、今は銀座で営業しているが以前は新富橋の袂に店があった時代、お客は舟でうなぎを食べに来た。現在のタクシーやバスのように、手軽に船が利用されていた。

。　。　。

鉄砲洲稲荷に近い稲荷橋のあたりには、常時沢山の船がもやっていて、七輪で煮ものをしていたり、赤ン坊を背負って働いている女房も眼につく。この辺り水上生活者の数は、相当居るのであろう。

今日ほど水洗トイレが普及していなかった頃は、肥桶のものを船腹にあけて、船を沖へ出して空にして帰って来るという話である。

少し上の高橋からは、八丈や大島通いの船が出た。東京湾内観光船は、イルミネーション、奏楽で、賑々しく納涼客を満載して発航した。

。　。　。

戦前の懐かしい思い出。

真夏の夜、蒸し〳〵する銀座の雑踏を離れて家路につく。三吉橋まで来ると、ホッとする。立ち止まって見渡すと、南正面に新橋演舞場、左よりに東劇、その鮮やかな灯の色が築地川に映る。采女橋から数えて四つの橋が平行していて、海からの涼風が吹き抜ける。と、南から北に向って、ゆっくり上って来る船の舳先に、カンテラの灯が一つ。船頭が長い竿をあやつって、舟べりを一歩一歩あるく。それは材木を積んでいて、私の居る橋の下を潜りぬけて、川上の材木河岸へ向うらしい。無心に、ジーッと見守る一篇の風物詩。

。　。　。

川のない町に生れた私は、橋が珍らしく、又、好きであった。子供の頃から、東京は近いので、毎年上京して、小網町の野田屋を宿にきめていた。

ここは小網河岸と呼ばれて、千葉の野田から運ばれてくる醤油樽の船が着くと、人足が野田屋の倉庫へそれを運び込んだ。この近辺は橋が多いが、一番立派で印象深いのが鎧橋であった。水天宮や人形町で遊んでの帰り路、右側に八幡さまと、大きな焼いもやがあり、その突当りに、鉄橋のような鎧橋が見える。橋の手前、左側横丁に、大きな鉄のお釜がすぐ眼につく。これは伊吹山のモグサを売っているモグサ屋で、目じるしのお釜の側の小路の奥に野田屋はある。この大きなお釜は、戦災で破損したけれど、焼け残りの一部残骸が、現在もモグサ屋の店の壁面に額のように掛けられていて、当初の刻銘の一部が残っている。後年私は、わざわざそれを見せてもらいに行ったことがある。

この鎧橋は、明治六年、木橋が架けられ、当時の三井、小野、島田の三家の出資であったと『中央区史』には見えている。

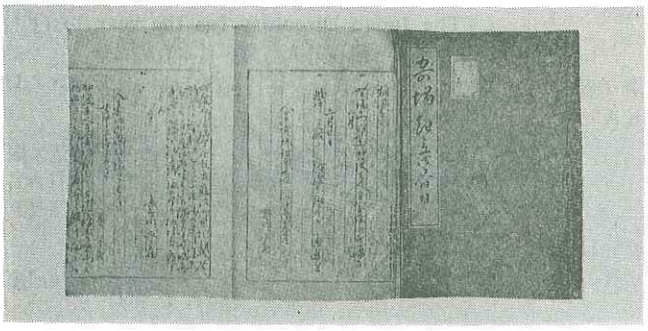
日本最古の鉄橋として誇っていたこの橋は、大層良質の鉄が使用されていたという。南詰には証券取引所、北詰には鴻の巣があった。フランス料理店で、明治の新しい女たちを初め、文人たちが贔屓にした。昭和三十二年九月十八日架け替えられて、開通式があった。威厳のある鉄橋が、姿を替えて、鎧をデザインした新感覚のさっぱりした橋になった。

もの皆、めまぐるしく変ってゆく、進歩前進と共に、時としては懐古を楽しむゆとりもほしい。（62・10）

郷土室より

購入資料のお知らせ

このこび当郷土資料室では、石川島人足寄場に関する資料を入手いたしました。表に「寄場起立御書付」と記され、東京監獄石川島分署と印刷された用箋に毛筆で書かれたものです。



◇第56回　東京を語る会のお知らせ

『写真家が語る　銀座の六十年』

講師　師岡　宏次　氏（写真家）

日時　平成元年二月十八日（土）

会場　京橋図書館　鑑賞室

講師の師岡先生は、昭和五年の東京復興祭の頃から、東京そして愛すべき〝銀座〟の写真を撮り続けています。これらの写真をもとに、銀座を語っていただくとともに、撮影の苦労話しなどもうかがいたいと思います。

銀座の昭和史としても興味のあるところです。多数の御参加をお待ちしております。

著書『想い出の東京』
『想い出の銀座』
『写真集　銀座残像』
『銀座写真文化史』
他　多数

明治時代 店名 人名 検索可能資料　その１　【明治初年、10年代】　京橋図書館蔵

店名・人名が検索できる資料を年代ごとにまとめてみました。（地図は除く）
（作成にあたっては、随時気づいた時にまとめたもので、これからも作業を継続していきたいと思っています。何かお気づきの資料がありましたら御教示にあずかりたいと思います。）

【明治初年】

（明治２年）
江戸町人地に関する研究　玉井哲雄著（昭53）
日本橋本石町二丁目町屋敷別住民一覧
（Ｐ198～201）　〔Ｋ212-タ〕

（明治２年）
東京市中各種問屋組合仲買人書上帳
業種別に住所、氏名　（早大大隈文書）
〔Ｋ6703-ト-1, 2〕
マイクロフィルム

（明治３・５年）
明治初期の在留外人人名録　寺岡寿一編（昭53）
（M3）『"Japan Herald" Directory and Hong List Yokohama 1870』　横浜の居留外人に限る
（M5）『"Japan Daily Herald" Directory and Hong List 1872』 江戸の居留外人の名前と職業
〔Ｋ283-メ〕

（明治５年）
東京時代（Ｐ.41）　小木新造著（昭55）
〔ＫＡ5-オ〕
竹川町、出雲町、南金六町住民一覧
（41名の地番、職業、土地所有別）

（明治６年）
第一大区東京地主細覧（抄）十小区　〔Ｋ334-ト〕
地区別に、地主名、その地主の居住地

（明治８年）
東京一覧　井上道甫編　〔ＫＢ05-ト〕
大小区別天皇、官省、公卿、華族の住所、姓名他

（明治９年）
東京各区地主名鑑　第一集（上・下）　竹内蝮亭編
（第一大区）地区別に名主名とその地主の居住地
〔Ｋ334-ト～1・2〕

【明治10年代】

（明治11年）
名所手続東京自慢　由利兼次郎編〔ＫＢ05-ト〕
名大区毎に居住華族名、地図・町名他

（明治12年）
明治文雅姓名録　清水信夫編〔Ｋ283-Ｂメ〕
詩人、書、文、篆刻、歌、画、俳諧、国文等の著名人の名簿　イロハ順に雅号、姓名、住所

（明治13年）
東京商人録　大日本商人録社刊〔Ｋ6703-ト〕
職種別で地区毎に住所、姓名、商社肝煎他

（明治14年）
改正東京案内　児玉永成編〔ＫＢ05-Ｂ1〕
華族、大臣、官員の姓名、住所
銀行、学校、有名店他

（明治14年）
東京現今文雅人名録　竹原得良編〔Ｋ283-ト〕
東京在住の文苑有名家の氏名のイロハ順に技芸、住所、雅号
（内容的には前出の「明治文雅姓名録」に続くもの）

（明治14年）
明治初期の在留外人人名録　寺岡寿一編
『The Japan Directory for the year 1881』
東京在住の居留外人名簿・日本人職員録
〔Ｋ283-メ〕

（明治14年）
東京府地券所有明細録　浅井重光編
日本橋のみ　町名番地順に坪数・値段・所有者名
〔Ｋ334-1〕

（明治16年）
東京名家繁昌図録　初編　吉田保次郎編
有名店の店名、店主名、住所　絵入り
〔ＫＢ05-ト〕

（明治18年）
東京府内区郡分醫師住所一覧（抄）日本橋区・京橋区
桜井寛編〔Ｋ490-ト〕
専門科別に医師の住所、姓名

（明治18年）
東京府茶業組合人名録（抄）日本橋区・京橋区
石井久兵衛刊〔Ｋ6703-ト〕
販売者の住所、姓名

（明治18年）
東京盛閣図録　新井藤次郎編〔ＫＢ05-ト〕
店名、店主名、住所、絵入り